

アジアの 虫

第8号

2004年3月10日発行

題字・カット：宋 貴美子

編集・発行 アジア児童文学日本センター

海外から110名参加申込み—第7回アジア児童文学大会—

8月4日から開催される第7回アジア児童文学大会の参加申込が終わり、中国、韓国、台湾など海外からの参加者は110名となりました。今回は特に香港からの参加者が15名にのぼり、そのなかには教育関係者が数名含まれています。また台湾からの参加者には図書館職員が3名おります。残念なのは中国、韓国、台湾以外にはモンゴルとマレーシアだけの参加となってしまったことです。なお国内の参加者については、申込の遅れている人がかなりいるために正確な参加者数をまだつかめておりませんが、約50名が参加するものと思われます。

当初予定していた200名という参加者数に達することが難しくなってきたことと、名古屋会場のプログラムだけ参加したいという希望がかなり寄せられていることから、大会実行委員会としては名古屋でのプログラム(8月5～6日)だけの「部分参加」をお認めすることにしました。すなわち、8月5日の「親子ミュージカル」「講演」「論文発表」「レセプション」および8月6日の「論文発表」の全プログラムに参加し、論文集等すべての大会資料の提供を受ける(参加者名簿にも登録)という内容で、経費は15,000円となっています。この部分参加を希望される方は「参加申込用紙」の右上隅に「8月5・6日のみ」と書いて3月末までにセンター事務局へ申し込んでください。(電話 0568-95-0091, Fax 0568-91-6961)

なお名古屋市での「親子ミュージカル」と「講演」、ならびに大島町でのプログラムについては、一般公開ですので、必要な入場料を払って参加してください。

しかた・しん会長急逝

当アジア児童文学日本センターのしかた・しん会長が、去る

12月7日入院先の病院で急逝されました。享年75歳でした。しかた氏は2002年8月、大連での第6回アジア児童文学大会に出席されましたが、帰国後に体調を崩し、肺機能の低下に伴って常時酸素吸入が必要となり、出かける時にも酸素ボンベを携行するという状況が続きました。昨年秋には徐々に体調が回復していたのですが、11月はじめに入院、1か月後に還らぬ人となりました。

12月27日午後、「しかた・しん氏を偲ぶ会」が名古屋市内のうりんこ劇場で開かれました。創作・演劇など幅広く活動された氏をしのんで、遠く九州からの参加を含めて三百名を越える方々が出席されました。

なお会長の急逝に伴い、あらたに会長を選任することとなり、センターの理事会および総会を書面で行なった結果、畑中圭一が会長に選ばれました。また副会長にはきどのりこ、井上寿彦があらたに選ばれ、これまでの中尾副会長とあわせて3名の副会長という体制になりました。

また、第7回アジア児童文学大会実行委員会の委員長も畑中会長が務めることとなりました。しかた氏の悲願とも言うべき第7回アジア児童文学大会の開催に向けて、新しい体制で準備に力を注いでいます。



特集 アジア児童文学大会の講演、シンポジウムをめぐって

第7回アジア児童文学大会では、講演会や親子ミュージカル、シンポジウムなどを広く一般の方々に公開することにしています。この号では、そうした講演やシンポジウムをめぐる論文や解説を特集します。

| | |
|---|----|
| ◇ しかた・しん「アジア的児童文学とは—時間イメージをめぐる試論」 | 2頁 |
| ◇ きどのりこ「日本のファンタジー—その現状と問題点」 | 4頁 |
| ◇ 成実 册子「科幻文学 vs 幻想文学—中国のファンタジーを知る手がかりとして」 | 6頁 |
| ◇ 高井 進「アジア児童文学大会に向けて—大島町絵本館から」 | 8頁 |

アジア的児童文学とは

—時間イメージをめぐる試論—

しかた・しん

はじめに

1999年、台北における第5回の大会において、私は「アジア的児童文学とは？その特質と傾向」ということで、Li・Tong（李懂）氏、Kweon Jeong-Saeng（権正生）氏、陳丹燕氏、三氏の作品を分析した。その中でアジア的児童文学とはいかなるものか、試論を試みた。そしてアジア的といわれるキーワードとして「自然との一体感、共生感」「輪廻しつづ連続する季節と時間の感覚」などを挙げた。ヨーロッパ近代文学においては「断絶」と意識されているものが、アジアにおいては地続きに連続していると感ぜられるのではないかと——そんなことを述べた。その後いただいた質問や助言をもとに、今回は特に時間感覚を中心に論じてみたい。

1.

シェークスピアの戯曲「ベニスの商人」において、商人アントニオが高利貸しシャイロックから胸の肉1ポンドをと迫られるのは、自分の持ち船が、約束の日、時間に帰って来る見込みがなかったためであった。アントニオに限らず、商人にとって時間は命にも代えがたい価値をもっていたのだ。一方高利貸しにとっても「時は金」であった。「神のものである時間で、金を稼ぐとはなにごと！」という教会側の非難をよそに産業革命の中で、時間は明確に経済的価値を持つようになった。労働者は時間を売り、資本家はそれを買い取り、さらなる価値を手に入れようとした。デュマの「モンテクリスト伯」に描かれるごとく、電信を使った情報の時間的速さは投機の対象でもあり、経済的価値を持つものであった。シェークスピアの時代からヨーロッパ近代には、時間は商品として認識されたのだ。



大連大会で発表するしかた・しん氏

そしてさらにニュートン力学の世界で、時間の等質均一性と不可逆性が確認されることとなった。時間の等質均一性、そして商品性は自明のこととして近代ヨーロッパなりアメリカなりでは認知された。

エンデの「モモ」(1973) が与えたショックは、この自明の論理に疑問を投げかけたところにあった。逆にいえばこうした時間イメージが当然のこととして存在していたから、モモのショックがあったともいえる。

2.

さてここで、前に紹介した Kweon Jeong-Saeng 氏の作品を読んでみよう。「ばあちゃんと手をつないで」(1990年 図書出版オルパルム)である。舞台は朝鮮戦争後、南北に引き裂かれた休戦ラインの近くの村。

チョンスクばあさんは、たった一人の孫、ヨンイと暮らしている。ばあさんの夫で北の兵士であったヨンイのおじいさんとは、休戦ラインで引き裂かれたまま消息も知れない。村をローラーのように踏みつぶしながら、行ったり来たりした戦争。戦争は終わっても引き続く憎しみの中で、ばあさんの母親は殺され、子どもは獄死する。ばあさんの手許には幼

い孫のヨンイしか残されてはいない。

ある夜、ばあさんはふと決意して、北に向かって歩き始める。心の中で夫に「おまえさん、ヨンイのおじいさんや、会いに来て下され。ヨンイを連れていくから」とひたすら念じながら——。おばあさんは心の中で呟く。「境界線で銃で撃たれれば、たおれて死ぬ。たおれて死んだら魂になっても行かなきゃのう」おばあさんは絶対に引き返すまいと、ヨンイの手をにぎりしめて、タンポポや山ツツジの咲く道を歩き続ける。

この作品の前半、チョンスクばあさんは何度かおじいさんに会いに休戦ラインの鉄条網を越えようとして、警備のアメリカ兵に撃ち殺される夢を見るのだ。ひどく生々しい夢。おばあさんの内面の中で、その夢が現実世界と次第に深く重なりはじめる。そのあたりの描写が、鋭く凄まじい。つまり、おばあさんの生きている現実世界を流れる時間と、夢の中で流れる時間とが、次第に重なりあって、ついには「魂になっても行かなきゃのう」という決意になるのだ。ここでは時間は不可逆で流れ去るものとしては捉えられていない。おばあさんにとっては、死んでもまた歩き続ける時間だ。円環となって巡る時間とでもいおうか。作中にタンポポや山ツツジの咲く道の描写が何度も出てくるが、ばあさんの時間は、そうした自然と一体化していることも、この作品は暗示しているのだ。

3.

こうした円環をなし自然と一体化した時間イメージは、日本においては宮澤賢治の作品や詩にもくり返しあらわれる。「風の又三郎」(1924年)は、山奥の小さな小学校に転校してきて、秋が来るとともに去って行った少年をめぐって、子どもたちのさまざまな幻想が描かれている。初秋の十二日をともに過ごしながらも、山の子どもたちには、転校生又三郎の实在のイメージより、吹きすぎる風としてのイメージしか残らない。風のイメージの中で、その初秋の時間さえ、あったかどうか、定かでなくなってくるのだ。この作品には小見出し代わりに、九月一日から十二日までの日付が記され、時間の流れが意識されるようになっていく。それがいっそう、風のように吹き過ぎる、時間のないイメージの世界を感じさせるのだ。最近アジアで宮澤賢治作品はよく読まれるようになったというが、それはこうした自然と一体化した時間への親近感があるのではないかと思う。

さて明代の長編小説、アジア各国の子どもたちにこれほどもてはやされた作品はないといえる西遊記を読んでみよう。唐の玄奘(三蔵法師)がインドに行き、中国に仏典をもたらした史実をもとに、孫悟空、猪八戒、沙悟浄が妖怪どもを退治して玄奘を助ける、きわめつきのエンターテイメント物語である。一見時間の流れに乗って冒険の物語が展開している

ように見えながら、実にこの物語の時間の流れは、そう単純なものでないことがこの二十年余りの研究の中で明らかになってきた。

史実である玄奘の旅(629?~664)から、明末期の1592年に世徳堂(せいとくどう)を中心とした作者グループによる現在に伝わるテキストが成り立つまで、ざっと九百年である。これだけかかって、講談、お芝居、小説など、大衆の前で読まれ演じられたさまざまな物語が混じりあい吸収しあい、その世界はふくらみ広がった。世界帝国であった元の時代を通過すると、ギリシャ神話まで吸収し、まさにユーラシア大陸の神話すべてを吸収するという広がり方である。そういう世界をもとに、腕利きの作者グループがエキスを引き抜き纏め挙げたのが世徳堂版の作品である。その中にはさまざまな仕掛けがあって当然といえる。

その構造や歴史については、幾つか優れた研究が出てきているのでそちらに譲ることにして、一つ指摘しておきたいのは世徳堂の作者たちが世界を広げ、エンターテイメントを盛り上げるために、時間の流れを自在に無視していることである。ここでは、ヨーロッパ近代文学における時間の必然性の論理など、どこかに消し飛んでしまっている。それにもかかわらず、小説として骨の太い構造を持っているのだ。

小説の構造をストーリー的な形とプロットの形に分けたとき、この西遊記を含め、私が挙げた一連の作品はストーリー的な部分が優位を持つ、といってもいいかもしれない。エピソードの数珠つなぎによる、ストーリーづくりだ。時間の流れの必然性よりも、エピソードの配列が優先する。「因果律による時間の必然」の重視がプロットの構造の特徴であるとするならば、ストーリー的な構造では、エピソードとその連なりが優先する。それを私は「物語性」と名付けたい。ヨーロッパ近代の時間イメージとは異なる時間の感覚がその基本にある。

終わりに

さて、こうした時間のイメージを論じることは必然的に生と死を論じることになる。宗教とは死を説明し納得させる物語であるとするならば、日本、朝鮮、中国、ベトナムの人たちの精神世界に大きな影響を残した儒教、仏教、道教における死と生の意識と時間の問題は分かちがたく結びついている。

従って、「アジア的な」とタイトルをつけたものの、この論の対象は、この三宗教が圧倒的な影響を持つ東アジアに限られ、インド亜大陸やイスラム世界、ポリネシアトライアングルと呼ばれる広大な海洋地域が抜け落ちたままの議論であることを、前回に引き続いてお断りしなくてはならない。そうした欠落を含めて、ご静聴くださった皆様にご心から感謝をいたす次第である。

(2002年大連大会での発表論文)

日本のファンタジー

— その現状と問題点 —

きど のりこ

ファンタジーの多様化

1980年代から90年代を経て現在にいたるファンタジー作品の流れの多様化は、ほとんどメルヘンとの区別を消滅させたばかりか、SFやホラー的なもの、ナンセンスなものも含まれるようになっていく。

また、日本の風土の中から独自の死生観を持って魔法の世界を紡ぎだした安房直子の、70年代から80年代の作品や、すでに60年代から『車のいろは空のいろ』でタクシーの運転手の松井さんが不思議なお客をのせたり、過去の町へ行ったりする物語を書いていたあまみきみの作品なども、メルヘンと呼ばれることが多かったが、近年はこうした作品も、広い意味でのファンタジーとして扱われるようになっていく。メルヘンとファンタジーとの境界は限りなく薄らいできているといえよう。

そのほか、舟崎克彦は『ぼっぺん先生の日曜日』（73年）とそれに続くシリーズの中で、ナンセンスな言葉遊びを織りまぜながら独特の世界を作りだし、岡田淳は80年代のはじめから、『放課後の時間割』など、「学校」という日常的な空間をファンタジーの場所とする手法で、子どもたちの共感を得るファンタジーを書きはじめた。85年には、その後アニメ化されて人気を呼んだ角野栄子の『魔女の宅急便』が出され、そうした影響もあって、小学校中学年向けのファンタジー作品にはく和製魔女>が多く見られるようになった。

浜たかやの『太陽の牙』（84年）をはじめとして、紀元前の西アジアの草原地帯を舞台にし、神話的な知識を駆使してスケールの大きいファンタジーを描き続け、シャーマニズムも関わるその世界は、90年代の長編ファンタジーの先駆けともなった。

90年代以降の作品の潮流

90年代以降の作品の特徴として挙げられるのは、一つにはく日本帰帰>ともいえる、日本の風土に根ざしたものが増えてきたことであり、またそれに関わって、特に日本の古代から中世の歴史を素材とした長編のファンタジーが書かれるようになったことである。

古代の神話や伝承は、どの国においてもファンタジーの豊かな源泉の一つになっているが、日本ではそれらが他国への侵略の歴史のなかで利用され、歪められてきたため、戦後は特に作品の素材としては敬遠されてきた。しかしそうしたことにあまりこだわりを持たない若い世代の作家たちが、自由に神話

や歴史をファンタジーの素材として用いるようになったのが90年代であった。

荻原規子は『空色勾玉』（88年）をはじめとして『白鳥異伝』（91年）『薄紅天女』（96年）を発表し、それぞれ好評を博した。日本の古代を舞台にしたこれらの物語は「勾玉三部作」と呼ばれる。いずれも天上の輝（かぐ）の血を引く氏族と、地下の闇（くら）の末裔である氏族との王権をめぐる争いが背景にあり、その二つの世界を融合する役割を、巫女的な性格の少女が果たす。「四つをあつめれば死を、五つをあつめればよみがえりをもたらす」という不思議な勾玉の存在が、これらの物語をファンタジーの名にふさわしいものとしている。しかし、この三部作については、いわゆる「貴種」（貴い血統の人びと）の物語であることに対して批判がなされた。

作者は日本神話のタブーをかるやかに飛び越え、それを自由に「夢の素材」として用い、むしろ現代の若者たちの愛のドラマを描いているのであり、日本国家、つまり大和朝廷の成立の歴史を描いているわけではない。しかし、わが国は現在にいたるまでくもう一つの物語>である「天皇制」に囚われ続けており、また作者がモチーフとした古い神々の物語は、ギリシャ神話や韓国の創世神話などと異なって、歴史のある時点から、「神の子孫」を絶対化するという明らかな政治的意図をもって作られたものだった。松谷みよ子など戦中派のこだわりを持つ作家がこのシリーズに危惧を抱いたのも当然といえる。

一方で90年代のファンタジーは、生きにくさを抱えた若い読者へのく癒し>の要素を含んだものとなってきた。現代を舞台にしたファンタジーの多くの主人公たちは、家族関係のトラウマや、いじめによる挫折感を抱えている。梨木果歩『裏庭』（96年）の主人公、照美という少女はいつも「世界の外にたった一人とり残されているような気持」を持っている。日常においてこうした疎外感を抱いている読者は、く自分の物語>としてこの作品に引きこまれていくだろう。

上橋菜穂子の世界

ここで、現代のファンタジーの代表的な書き手の一人である上橋菜穂子の作品を見てみたい。上橋は89年の『精霊の木』でスタートし、『月の森に、カミよ眠れ』（91年）で日本児童文学者協会新人賞を受け、その後「守り人」シリーズとして『精霊の守り人』（96年）『闇の守り人』（99年）『夢の守り人』（2000年）『虚空の旅人』（01年）から最近の『神の守り人』（03年）までを出し、小学校高学年から大人までの幅広い読者を獲得している。

文化人類学の研究者でもある作者は、その作品世界でも多民族、多文化の共生・混生を描くことが多い。『精霊の木』は、先住民をほろぼして惑星ナイラに住みついた人びとが、その記憶を情報操作によって隠していたにもかかわらず、先住民との混血児で

ある少女の「夢見の力」によって、事実が明るみに出るという物語だった。『月の森に、カミよ眠れ』は古代の狩猟採集社会であったムラが、大和朝廷の支配によって稲作文化を受け入れていく時期の物語だが、ここでのカミは天皇の祖先としての神ではなく、太古の精霊のような自然神である。巫女的な役割をする少女が主人公となるのは、前記の荻原規子の作品と共通している。

「守り人」シリーズは、日本の古代王朝とチベットかネパール、または作者の研究分野であるオーストラリアの先住民アボリジニの社会を混ぜあわせたような作品世界の中で、王族から呪術師までさまざまな共同体に属する人びとによって物語が織りなされているが、ファンタジーとして注目されるのは、物語世界が、現実と、それに重なる「精霊の世界」の二重構造を持っているところであろう。また狩猟民族であった先住民のヤクーを追いやってヨゴ人たちが建てた新ヨゴ皇国が舞台の一つとなっているように、『精霊の木』からの一貫した世界観がこのシリーズ全体にもあらわれている。また、30代の女性で「女用心棒」としての「闘う女性」であるバルサを主人公にしたところにも、作者の主張が見られる。最新作の『神の守り人』では、そのバルサが自分の内部にもある暴力への衝動を見すえており、この現代の現実世界のメタファーともなり得ている。

日本のファンタジーの問題点

90年代のファンタジーをめぐるいくつかの議論はあったものの、論争と呼べるものがなかったことは、作品があまりに多様化したためでもあり、また日本の児童文学全体において、批評の分野が停滞しているためでもあろう。しかし、日本の現在のファンタジーは、こうした多様な広がりを見せつつも、総体的に見ると、いくつかの問題点を指摘することができる。

一つは、作品の核心ともいえるファンタジックな部分や異世界の構築が、まだ観念的で弱いことだ。言葉やイメージは巧みに操られ、プロットもよく組み立てられてはいるが、「もう一つの現実」を作り上

げるための、作者自身の内面的な衝動がいまひとつ欠けている。例えば前記の『裏庭』だが、主人公の状況と異世界に入りこむ動機はよく描かれているものの、肝心の異世界は観念的で、印象の弱いものになっている。

もう一つの問題点は、現代を舞台にし、そこに生きる子どもたちを主人公にした作品が少ないことである。世界のファンタジーの流れの中では、以前は妖精や魔法使いだけが持っていた魔法の力が、しだいに子どもたち自身に移行してきた。そしてそれはまた子どもたちが潜在的に持っている力の寓意にもなり、物語の中に自己を投入して読む子ども読者への励ましとなっているが、日本ではまだそうした物語は少なく、仮想現実（バーチャル・リアリティ）の中に自己を投入するゲームが圧倒的多数の子どもたちの共通体験となっている。そうした、ゲームを超える力を持つ物語が日本にはまだ不足している。それは、物語の核心を支える思想の弱さにも起因しているだろう。

アジア的な想像力を——上橋菜穂子への期待

従来、西欧の作品の影響が強かった日本の作品に、90年代以降、日本の歴史や風土に根ざした作品が多くなったのは喜ぶべきことだが、以上に述べた問題点の克服とともに、これからはアジア的な想像力との出会いが求められるだろう。

筆者が現代日本のファンタジー作者の中で最も注目しているのは上橋菜穂子であり、彼女の作品には、アジアを含めた多民族、多文化の共生、ジェンダー（社会的性差）による差別の克服といった新しいテーマが見られる。しかし、その上橋作品においても作品世界の中の異世界である精霊の国ナユグについては、それが現実世界との二重構造になっているということが十分に描けておらず、観念的な描写になっている。こうした日本のファンタジーの弱点をどのように克服していくかが今後の課題であろう。

〔韓国の雑誌『創批オリニ』第2号に掲載の「日本のファンタジーを考える」から抜粋〕

アジア児童文学大会・講師紹介 I

うえ はし なほこ
上 橋 菜穂子（講演会「アジアにおけるファンタジー」講師）

1962年東京生まれ。立教大学大学院博士後期課程単位取得。専攻は文化人類学で、オーストラリアの先住民アボリジニの研究にたずさわっている。現在、川村学園大学助教授。

研究者であるとともに、作家として「守り人」シリーズ（『精霊の守り人』『闇の守り人』『夢の守り人』『虚空の守り人』『神の守り人』）など、スケールの大きいファンタジーを次々と発表し、サンケイ児童出版文化賞、日本児童文学者協会賞、巖谷小波文芸賞など数多くの賞を受賞。作品としてはほかに『精霊の木』『月の森にカミよ眠れ』『狐笛のかなた』などがある。文化人類学者として、また作家としての経験から、西欧系のファンタジーとは異なるアジア独特のファンタジーの可能性と課題について、どんな問題提起をしてくださるか、大いに期待されることである。

科幻文学 VS 幻想文学

中国のファンタジーを知るてがかりとして

成 實 朋 子

「中国のファンタジーはどこへ行くのか（中国幻想文学取問路在何方?）」と題する記事が、2003年8月19日、中国の文芸専門紙「文芸報」の冒頭をかざった。文中“湖”と号する記者は、同年6月17日に亡くなった中国の科学幻想文学作家（以下科幻文学）の草分け的存在である鄭文光（1929—2003）を取り上げながら、「哈利・破特（ハリーポッター）」の成功以降、盛んに作品が発表されるようになってきた幻想文学に対し、めっきりふるわなくなった科幻文学の現状を憂えた。

この「科幻文学」という言葉はSFと訳されることもある。しかしいわゆるSFと科幻文学は似て非なる存在である。「科幻文学」のさきがけとなったのは、清末の翻訳SFであったが、抜きん出て多く訳されたのはジュヌ・ヴェルヌの作品で、『十五小豪傑』（1901）や『海底世界』（1902）、『地底世界』（1903）といった作品が、この時期数多く出版された。この清末のヴェルヌブームには日本が大きく関わっている。『十五小豪傑』の訳者は清末の思想家・梁啓超（1873—1929）であるが、その原本となったのはフランス語のものではなく、森田思軒の『十五少年』（1896）で、日本語版からの重訳であった。（森田思軒は英語版をもとにしたというから、中国語版『十五小豪傑』は英語・日本語・中国語と三度翻訳されたものであった。）同様に魯迅の訳した『地底世界』も井上勤が邦訳したものからの重訳であったと言われている。このように当時の日本は中国にとっての文化・科学の中継地点の役割を果たしたと言え、多くの書籍が日本語からの重訳という形で日本から中国に紹介されていったのである。

むろんこの清末のヴェルヌブームは、明治期の日本がそうであったように、ヴェルヌの文学性に注目してというよりも、科学についての関心、海外事情も含めた未知なるものへの好奇心によって支えられたものだった。むろん中国が近代国家として成立し、国力をつけていくということへ強い希求がその底流にあったということは言うまでもない。科幻文学はその誕生の時より「国家」のありかたと深いつながりを持っていたのである。実際民国期の少年雑誌は、少なからずの頁を科学読物にさいている。そこには

読物を通じて科学的な知識を得ることにより、科学立国を目指していこうという意気込みが感じられる。その後中国の科学読物は、ソ連の強い影響も受けながら、科学的知識に基づいた、科学普及を目的とした「科学文芸」或いは「科学普及小説」（科普小説）にまとめられていき、科幻文学はその一領域となっていたのである。

科学普及を目的とするだけに、それが児童文学作品として発表される場合、教育的・啓蒙的色彩が強くなるのは当然のことである。中国の児童向け科幻文学の代表的作品である葉永烈（1940—）の『小靈通漫遊未來（シャオリントン未來へ行く）』（1978）を例にとって見てみよう。これはシャオリントンという少年が見聞した未来の世界を描いた物語であるが、そこではロボットが人間たちの手助けをし、遺伝子操作で野菜の生育をもコントロールできるため飢えもない世界が描かれている。日々遺伝子組み換え食品の安全性を問うニュースを耳にしている我々からすれば、遺伝子操作で倍以上の大きさになった食品の話など、もはや素直に楽しむことは出来ないが、発表された当時にとっては、読物としても楽しく読めたことだろう。またそれは、子どもたちに目指すべき理想的な未来の世界を提示することにもなっただろう。ここには科学の万能性を信じていた時代の大らかさが感じられる。

この作品はこの時代の中国児童文学を代表するものの一つであり、ドラマ化されたこともあって、一大ベストセラーとなった。しかし近年児童文学の世界では、科幻文学がベストセラーとなったというのはついぞ聞かない。『科幻故事大王』や『科幻童話集』のようなものは、相変わらず出版され続けているのだが、古い作品や海外の作品のダイジェストが多いように思う。むろん日本では児童向けのSFの出版自体全く盛んではないから、出版されるだけでもましとは言えるのだが……。もしかしたら書き手もあまりいなくなっているのではあるまいか。先に名をあげた葉永烈にしても、近年は科幻文学の新作を書いたという話はあまり聞かない。

しかし中国政府は科幻文学作家の育成に力を入れているようである。さきほどの記事の中に次のようなくだりがあった。「1998年、北京市科協は科普（科学普及）専項資金を設立し、毎年80万元を出資して科普作品を募集し、四年間で百部にもものぼる作品を集めたが、科幻作品は一つも無く、科幻ファンをがっかりさせた。」80万元とは日本円で約1200万円。それほどの大金が科幻文学も含めた科学普及読物に出資されているとは、寡聞にして知らなかった。中国最初の有人飛行を成し遂げたということもあり、政府としては科学普及を目指していくうえでも、科幻文学を作家たちに多に書いてもらいたいと思っっているようである。しかし80万元もの公的資金を投入してもなお作品は出なかったのである。

おそらくそれは科幻文学が、イマジネーションだけでなく、相応の科学知識といったものを必要とするため、新人作家が育ちにくいという土壌のためもあるだろう。テクノロジーの発展があまりに急すぎて、数年たてば作品が成立しなくなる可能性があるというのも、執筆をためらわせる要因かもしれない。しかし何よりテクノロジーの万能性といったものを、書き手も読者も昔のように天真爛漫には信じがなくなっているというのもあるのではないだろうか。現在の我々はテクノロジーの恩恵を十分に受けているながらも、その負の部分をも垣間見ているのであり、そのような中で旧来通りのテクノロジー万能の世界をうたいあげ続けるというのも無理のあることである。いずれにせよ、鄭文光の死は、私に「科学」と「幻想」が幸福な未来を信じて、歩みを同じくしていた時代の終焉を思わせた。

作家たちはお家芸の科幻文学ではなく、「科学」抜きの「幻想文学」の方へと次第に活躍の場を移しているように思える。例えばかつて科幻文学界の最高の権威である“銀河賞”を受賞し、期待の若手作家であった楊鵬は、最近では科幻文学を離れ、幻想文学の創作にはげむとともに、アニメーションや漫画に関する執筆を盛んにしている。(因みに彼の最新の著作は『Cartoon 叙事学』。児童文学関係者によるアニメーションや漫画に関する研究物としては、中国で最初のものではないだろうか。もっとも文中の日本漫画略史等には多に問題がある。)他にも例えば21世紀出版の「大幻想文学シリーズ」の一冊であった牧鈴の『夢幻荒野』などは、コンピューターと異星人が重要な道具立てとして使われているから、以前なら科幻文学に分類されていたものであろう。しかしこれも幻想文学として発表されている。確かに『夢幻荒野』では、コンピューターを先進的な技術として捉えるよりも、その力を盲信することの危険性が描かれており、これまでのような科学技術礼賛一辺倒では無い。同じくテクノロジーに関する内容

を描くのにしても、作家たちはより自由にその物語世界を表現できる幻想文学という場を好ましいものとして捉えているように思える。

前述の「大幻想文学シリーズ」に参加している作家には、班馬・秦文君・薛涛・彭懿・張潔・韋伶・彭学軍・張品成・張之路・左泓・戴臻・牧鈴・殷健靈・魏濱海といった、現在の中国児童文学界を代表する錚々たる顔ぶれがそろっている。書き手たちの年齢を見ても、上は1951年生まれの班馬から、下は1971年生れの殷健靈や薛涛といった中国児童文学の中核を担っている年齢層の書き手たちがそろっていることに気付く。このことから、幻想文学が作家たちにとっていかに魅力的なジャンルとして映っているかが理解されよう。

冒頭にあげた記事では北京師範大学が今年度から科幻文学を研究する大学院生を募集することを紹介し、次のようにこの記事をまとめている。「私の知るころによれば、これはわが国の高等教育史上初めてのことである。もしかしたらこれが近年停滞している中国科幻文学界に強力な助けとなるかもしれない。」確かに前述してきたように中国の科幻文学には他には無い大きな特徴があるから、研究領域としては面白いかもしれない。しかし作品は生まれてくるであろうか。作家たちは科学知識も不十分なら、書く動機もない。幻想文学なら自由に書けるし、束縛も少ない。それどころかうまくあたってアニメ化でもされれば、実利的なもうけもあるのである。これはいささかうがった見方かもしれないが、国家が力を入れれば入れるほど、作家や読者は科幻文学から離れていくような気さえもする。いやもしくはしたたかにこの機をとらえ、頭角を表してくる作家や研究者というのもあるかもしれない。中国の科幻文学と幻想文学の対決に、いましばらく注目してみたい。

(中国の科幻小説についての詳しいことは、武田雅哉+林久之の『中国科学幻想文学館』大修館書店を参照されたい。)

アジア児童文学大会・講師紹介Ⅱ

パン
イ
懿

(講演会「アジアにおけるファンタジー」講師)

1958年中国沈陽生まれ。大学で生物学(昆虫学)を学び、卒業後は科学教育映画の監督をつとめながら童話を書きはじめた。1991年、東京学芸大学に留学。帰国後、上海少年儿童出版社に勤務しながら創作に励み、長編小説や童話集などを発表してきた。またファンタジーの研究と紹介に力を注ぎ、1998年『世界幻想文学導読』(大幻想文学理論巻)を出版した。1999年、大阪国際児童文学館の客員研究員として児童文学、特に日本のファンタジーについて調査研究した。中国作家協会会員。『与幽靈擦肩而過』などの作品のほか、松谷みよ子、安房直子、あまんきみこなどの作品の翻訳も多い。

作家、翻訳家、編集者、研究者という多面的な活動をされている中国児童文学の若手から、アジアにおけるファンタジーについてどんな展望を聞くことができるのか、楽しみである。

アジア児童文学大会に向けて

—大島町絵本館から—

大島町絵本館館長 高井 進

(1) はじめに

大島町絵本館は今年で10周年を迎えるが、かえりみてこの間さまざまのエポックがあった。なかでも2001年から「手作り絵本コンクール」の春の部(18歳以上対象)に、応募を世界各国にまで広げたことがある。

そしてその年、くしくもアジア児童文学日本センターの第2回研究会を絵本館で開催していただいたことであった。この年が私の中で大きなエポックとなったのは、この研究会の記念講演、即ち、君島久子氏の「アジアのシンデレラ物語」を拝聴し、頭を背後からなぐりつけられたような衝撃を受けることがあった。というのは、私は絵本館の開館以来ある種の“後ろめたさ”を引きずっていた。絵本といえば、グリムやアンデルセンを生んだ西欧にばかり目を奪われ、古来日本の“師の国”たる中国やインドなどアジア諸国から目をそらしていなかったか、という問題にいつも悩まされていたからである。

(2) 最初の物語

西欧固有の物語と信じていたシンデレラの物語が、実はそのルーツがイタリアではなく、それより8世紀も古い唐の時代の『葉限物語』であるという。しかも西欧の伝承は、めでたし、めでたしで終わるが、東洋の場合、主人公が何度も死んではまたよみがえるという、物語として深みのあるものになっているという。

ところで、アジアで最古の『インドのシャハリ、ヤード王とその弟君の話』は、6世紀ササン朝ペルシャに入り、『アラビアンナイト』となり、ロマンに富んだ冒険物語として受け入れられた。更に8世紀末迄にイスラム思想に色づけられて『千夜物語』となり、更にアラビヤ説話も加えられて12世紀頃には『千夜一夜物語』として現在のよう形に整ったものようだ。

日本で最古の物語文学といわれる12世紀の『竹取物語』もまた外国、即ち中国の仏教説話がルーツである。中国の説話の影響で生まれたのは『日本霊異記』であり、これに示された仏教の因果応報の理の具現のための竹取物語などが含まれる『今昔物語集』が生まれた。数多くの仏教説話集は中国の影響を受けながらも、日本に関する物語は日本そのものである。例えば日本六十余州で地名で登場しないのは、壱岐、対馬と石見の三国だけである。

尤も、物語に登場する人物や地名などが日本であっても、物語の骨組みや思想は、多くの場合中国や

インドに求めなければならないようだ。竹取物語のかぐや姫伝説の掉尾をかざる天の羽衣話は、日本各地に点在する白鳥伝説と重なって人々の想像をかりたてて来たが、これとても原初の物語は中国であるという。

(3) 物語絵本の祖

「物語のいできはじめの祖」が竹取物語であり、多分に中国の影響を受けたものであっても、この物語の流布に大きくかかわったのは絵巻物であろう。連続式絵画を卷子本で示す手法は、わが国独特のものであり、『源氏物語』の「絵合の巻」に物語絵巻の面白さを競う行事が語られている。この絵巻物は文字や解説を伴わなくても、「信貴山縁起」のように逆に想像力を高め、物語文学と絵画とを結びつける結果となっている。

ところでこうした物語絵や絵本に収められる素材の祖はどのようなジャンルが多いのだろうか。私が勝手な分類ながら、絵本館の図書室の絵本分類にあたって念頭に置いたのは主として次の四つのジャンルであった。

- ① 神話 (Mythology) 地球上の各地域で大昔に起こったと思われる事を物語としてまとめ、国や民族を統べる神々体系がつくられ、自然や動物が付随して語られた。日本神話は『古事記』に始まるが、そこには日本民族を形成してきた海外諸民族、諸文化の痕跡が残っている。
- ② 伝説 (Legend) 事実または民間口承による「言い伝え」に基づいて告げられる物語であり、歴史・英雄・地名の三つの伝説があるが、自然や民間信仰なども加わる。日本民俗学の立場では神話と並んで民族の心の糧として大切な固有文化とみなされている。
- ③ 民話 (Folk Tales) 柳田国男は「神話は民族固有のものだが、民話には世界的共通性がある。民話は神話の星くずでもある。」と言っているが、今日では広い意味の民間説話としてとらえられる。寓話と並んで民衆の物語ともいえる。
- ④ 寓話 (Fable) 『イソップ物語』のように教訓的な内容を他の事物や他の時代に移した説話であり、妖精・仙人・小鬼など超自然的なものに始まり、童話、昔話、お伽話、説話など民間伝承のあらゆる物語をも含んでいる。

(4) 第7回アジア児童文学大会に向けて

平成13(2001)年5月、故しかた・しん会長から大島町絵本館をアジア児童文学大会の第二会場としての参加要請があり、同年10月、大島町長から協力への意思表示がなされた。以後この大会への準備をすすめてきた。

大会を一過性のものに終わらせないために次の二つの事業をイベントとして位置づけ、大会へのリンクを図ってきた。

① 竹取物語展（'03. 8/1~8/10）漆芸家の武内良文氏の呼びかけで県内外の竹芸をはじめとした10の分野の工芸作家が、それぞれのかぐや姫物語を展開した。展示を通してアジア諸国との異相性を探ろうというものであった。

② アジアの絵本展（'03. 11/1~'04. 7/30）アジア数カ国の児童文学者が一堂に会してその異相性を論ずることは稀有で空前のことである。ために先ず参加する私ども職員、そして県民が各国の国情や習俗、そして絵本に接しておく必要ありとして、予想参加国の月ごと展示会を開催し、予習しておこうというのである。そして大会開催月の8月は全参加国の絵本を一堂に展示する予定である。

なお、この成果を大会参加の皆さんに知らせるべく、『おおしま絵本文化』9号（'04.8.1.発行予定）に展示した各国の代表絵本、各国の国情、展示した生活具などを記録として記載するはずである。

（5）おわりに

依頼されたテーマは「シンポジウム『絵本の民族性を考える』への期待」であった。その限りでは各国の絵本の中でアジアの他の国と類似又は同類のテーマ、例えば「羽衣伝説」などの絵本をとりあげ比較検討し、各国の特色をあげつらうべきだろう。だがその入口で戸惑ってしまった。まず自国の現状を

みるうちに児童文学とはなになのかでつまづき、最初の物語本、そして物語絵本の定義付けさえ出来ないうちに時間となってしまった。

私は参集される多くの権威から次のような点について教示いただき学習が深められれば幸いとひそかに期待している次第である。

《1》 日本の名作絵本の原産地を知りたい。

《2》 それが各国で変化して相を変えたのであろうが、何が影響として大きいのか、（社会的にみたい）

《3》 近年の創作絵本を除き、先述の分類中の神話と伝説の中で各国固有のものはないか。

《4》 先述の分類の民話と寓話の中で各国の個性を示す代表作品を指定できないものか。

というような視点で大会には大いに教示を願うばかりだが、原産地（私は師ノ国と言っているが）探しや、単に異相性を追究することに何の意義があるのか、と自問している状況である。ただ漠然とはあるが、こうした作業を重ねるうちにアジア民族としてのidentityを共有し、お互いに理解し合うことで尊敬し、戦いのない平和な国づくりをめざそうとしていることだけは分かる。政治・経済や宗教などは国を分け、人々を遠ざけるが、絵本や物語には国境がなく、人々を限りなく近づける大きな力のあることを確信している。

シンポジウム“絵本の民族性を考える”登壇者

黒井 健 くろい けん（1947~）新潟市生まれ。新潟大学教育学部美術科卒業。絵本編集の仕事を経て73年からイラストレーターとして絵本・挿絵の仕事を中心に活躍している。83年第9回サンリオ美術賞を受賞。主な絵本作品に『ごんぎつね』『手ぶくろを買いに』『猫の事務所』、画集に『ミシシッピ』『雲の信号』など。

李 億培 イ オクベ（1960~）韓国京畿道ヨンイン生まれ。弘益大学美術学部彫塑科卒業。挿絵や絵本の仕事にたずさわり、97年、「世界でいちばん強いオンドリ」でBIB（ブライスラハ国際イラストレーション・ビエンナーレ）に入選。日本で出版されている絵本に『力持ちのパンチョギ』『ソリちゃんのチュソク』がある。

高 明美 カオ ミンメイ 台北生まれ。台北の大学院でロシア語科を修了後、日本に留学。岡山大学大学院修士課程心理学専攻修了。大阪国際児童文学館の客員研究員として98年9月から1年間、日本の絵本を研究した。心理学を生かし、台湾で児童書の編集や評論活動、絵本の翻訳などに携わっている。

コーディネーター

高井 進 たかい すずむ（1931~）富山県生まれ。神戸大学文学部史学科卒業。（財）大島町絵本文化振興財団理事、富山近代史研究会主宰。絵本館開館時から館長を務めている。

第7回アジア児童文学大会 公開プログラムのご案内



今回のアジア児童文学大会では、児童文学・児童文化に関心をお持ちの方々に広く公開するプログラムを用意しております。

8月5日（名古屋会場）と、8月8日（富山県大島町会場）の公開プログラムの概要をご案内しますので、ご紹介いただければ幸いです。



8月5日（木）

◇ 親子ミュージカル「アジアの風」 10:40～11:30 名古屋市アートピア・ホール

自主的に参加した50名の大人と子どもがワークショップを重ねて、しかた・しん作ミュージカル「アジアの風」を上演します。東アジアの民話をベースに、各国・地域の詩人が書いた少年少女詩を織り交ぜながら、アジアの子どもたちを結ぶ「風」をうたいます。

◇ 講演会「アジアにおけるファンタジー」 13:00～15:30 名古屋市アートピア・ホール

日本と中国の代表的なファンタジー作家、上橋菜穂子氏と彭懿氏がアジアにおけるファンタジーの可能性と課題について語ります。《講師のプロフィールについては5頁と7頁をご覧ください。》

8月8日（日）

◇ 分科会 10:00～12:00 大島町絵本館

A 講演会「これからの絵本」

I 太田大八氏（聞き手：和歌山静子氏）

1918年生まれ。多摩帝国美術学校図案科卒業。50年以上にわたり、絵本や挿絵など多彩な表現活動を続けている。1963年、日本児童出版美術家連盟（童美連）を設立、初代理事長となる。その後、美術著作権連合や日本イラストレーター会議などを設立して活躍、現在は「こどもの本が大好きな人たち みんなが手をつなぎ大きな波を起こそう」と、“こどもの本WAVE”の運動を推進している。主な絵本作品として『馬ぬすびと』『かさ』『やまなしもぎ』『だいちゃんとうみ』『絵本西遊記』などがある。

II 唐 亜明（タン・ヤミン）氏

1953年北京生まれ。1983年来日、東京大学大学院博士課程単位習得。福音館書店で絵本の編集に携わりながら、作家としても活躍している。絵本に『ナージャとりゅうおう』などがある。

B ワークショップ「手づくり絵本」

C 朗読「耳であじわうアジアの絵本」

◇ シンポジウム「絵本の民族性を考える」 13:30～16:30 大島町絵本館

| | | |
|-----|----------|-------------|
| 登壇者 | 黒井 健（日本） | 絵本作家、童美連理事長 |
| | 李 億培（韓国） | 絵本作家 |
| | 高 明美（台湾） | 編集者、翻訳家 |

コーディネーター 高井 進 大島町絵本館館長

《登壇者、コーディネーターのプロフィールについては9頁をご覧ください。》



風のたより

「中国書店（福岡）」のホームページに

『鉄格子に海風が吹いて』の翻訳掲載

馬場与志子

冰子さんの同意を得た上で、「中国書店」のホームページに掲載させていただいています。

先ずヤフーか何かで「中国書店」を検索し、「網絡沙龍（インターネット・サロン）「学芸之間」に入ります。『鉄格子に海風が吹いて』の一番下の（-1）から（0）（1）（2）……と上に向かって読み進んでください。まだ第1集の10編だけしか掲載していませんが、この文をお読みいただく頃には、第2集も載せられているかも知れません。

冰子さんとは、今から4年半前の1999年8月に台北での第5回アジア児童文学大会でお会いしてからのおつきあいです。その時いただいて帰ったエッセイ集を翻訳して、発表する機会を得ないまま、今日に至ったわけです。

ホームページへの掲載は初めてで、読んでいただけるかなと危惧していたのですが、読んでくださった方から、メールやお手紙で感想文が寄せられて、冰子さんのお人柄・体験・文章力などによるものと、感じ入っております。

「悲しみのいっぱいまったひとつひとつの物語は、冰子さんの心の底の到底癒えることのない痛みと苦しみの上澄みのように思え、読者（私）の心が同情が生み出すやわらかな愛情につつまれます」（50代男性）など、感想文全部を紹介することはできませんが、翻訳してよかったとしみじみ思っております。

もともと児童文学作家である冰子さんは、名古屋大会にもご参加の予定で、再会を楽しみにしております。

同人誌紹介

まゆ 91号 2003年8月刊

訳詩「ぼくのとうさん」 艾青作 小笠原治嘉訳
「北海道児童文学私史（4）」 小笠原治嘉
（★中国文学者斎藤秋男氏について論述）

まゆ 92号 2003年12月刊

訳詩「太陽のお話」「荒地」「草を刈る子」
「コーリヤン」 艾青作 小笠原治嘉訳

連絡先：童房舎（室蘭市八丁平4-25-25）

Tel. 0143-46-0757

『バイバイ。』の韓国出版記念行事に

参加して

李 慶子

昨年12月18日夜、わたしはソウル・仁川空港に下り立った。一昨年に続き2度目の韓国訪問だ。今回は拙著「バイバイ。」の韓国出版にあわせて、その記念行事に参加するためだ。空港には遅い時間にもかかわらず、ウリ教育出版社の担当編集者、イムさんと上司にあたるソンさんが迎えにきていた。もちろん、わたしたちは初対面だ。しかし、出版社のホームページ上に載せたいからと言われ、顔写真を送っていたので向こうは到着出口から出てきたわたしにすぐ気づいて手をふってくれた。翻訳上の問題をふくめ、担当者と何度も電話で打ち合わせをしていたので、初対面のような気がしない。

訪問前「ソウルはとても寒いので、マフラー、帽子、耳当て、マスク、手袋などなど防寒対策をお忘れなく」とイムさんから何度もいわれて笑ってしまったわたしだったが、ほんとうに寒かった。

首都高速を通ってソウルへ。橋につけられたイルミネーションが映え、美しい。車中で出来上がったばかりの韓国版「バイバイ。」を見せてもらう。日本版よりも一回り大きい。中の挿絵はそのまま使われているが、表紙は違う。挿絵の一枚を表紙に使っていて、迫力があつた。同じ作品なのに表紙が違うとこんなにも印象が変わるものかと、正直驚いた。

翌19日は景福宮近くの出版文化会館で「著者との対話」と題する記念講演。それに先だって午前11時から記者会見が予定されていた。当初、記者たちをまじえて食事をしながらの歓談会というふうに聞かされていたので朝鮮日報をはじめ、報道関係者の多さに驚いて足がすくんでしまったが、時すでに遅し。もう開き直るしかない。記者たちの質問は祖国、民族、児童文学などなど多岐にわたった。

韓国は今冬、最高の寒さで零下8度。3時から行われる講演会場に移動するわずかな距離を歩く間も、耳はちぎれるほど痛い。道のそこかしこが凍りついている。しかし日本からやってきた同胞の児童文学の書き手による韓国初講演を聞こうと、会場には大勢の人がつめかけていた。子どもの姿をみつけたときの驚きと喜びは言葉にいいつくせない。

一歴史の陰におおわれた在日朝鮮人の人生。その息づかいをよむ。わたしたちが目目を背けてきた彼らの人生が「バイバイ。」の中にあります。

韓国版発売前に出版社がインターネットやマスコミ関係に紹介したコピーだ。なんとも気恥ずかしいコピーだが、韓国と日本。そして在日の子どもたちに手渡された「バイバイ。」が、明日をになう子どもたちの架け橋になってくれればうれしい。

雑誌紹介 韓国で刊行された季刊誌

『創批オリニ』 きどのりこ



2003年の夏、韓国の「創作と批評社」から児童文学の評論誌として季刊誌『創批オリニ』(チャンピオリニ)が創刊された。まさに特筆されるべき快挙だと思うので、ご紹介したい。

創作と批評社といえば、季刊誌『創作と批評』をはじめ、「創批新書」や歴史、文学評論、社会学、思想などの分野から小説、児童書を含めた、知的水準の高い書物を世に送り出してきた、韓国の代表的出版社だ。「生き生きした批評精神で、児童文学の新しい時代を力強く開いていく」(創刊号巻頭論文より)とうたうこの雑誌の発刊の背景には、現在、市場的にも活況を呈している韓国の児童書の状況と、それに流されることなく評論、批評を深め、児童文学の存在の基盤をゆるぎないものとしようとする心意気が感じられる。創刊号は「韓国児童文学、どこまで来たか」の特集や「絵本」を語る誌上討論、創作と詩、評論、イラクの子どもたちのルポルタージュ、ネストリンガーの評論「児童文学は文学か?」の翻訳、ほんの紹介記事などが満載されている。2003年秋の第2号はファンタジーの特集で、私も「日本のファンタジーを考える」を寄稿した。

創作と批評社は社屋の移転に伴い、社名を「創批」(チャンピ)と変え、2003年冬の第3号からは創批の発行となっている。この号にはアジア児童文学日本センターの会員、金永順さんが「文学史発掘」のページで『ファンソとトッケビ』は李箱の創作か?という論文を載せている。

各号、260ページを越える多彩な内容のこの雑誌、レイアウトも典雅ですっきりしている。批評の分野が停滞気味の日本から見ると、このような雑誌の刊行は、いかにベストセラーで潤っている大手出版社を後ろ盾にしているとはいえ、羨ましい限りであり、活気と熱気に満ちた韓国児童文学の現況が伝わってくる。

第3回 韓国朝鮮児童文学セミナーへ

どうぞ オリニの会・オリニほんやく会

◇日時 2004年4月3日(土) 13:30~17:15
◇会場 神戸学生青年センター(阪急六甲駅徒歩2分) TEL078-851-2760

◇プログラム

金朱美:(民話)朝鮮のシンデレラ物語「コンチパッチ」、「義犬伝」など

仲村修:「戦後日本の韓国朝鮮児童文学資料を収集して」

木下豊二郎:『南北朝鮮児童文学短篇選集』をだして

李在馥:(代読)「児童文学図書共同出版と平壤訪問」

李慶子:(講演)「ソウルの『バイバイ。』出版記念会に招かれて」

(ビデオ)「美しい遺産・李五徳の手紙・秋夕特別ドキュ」(KBS03年9月)

*小説『モンシル姉さん』絵本『こいぬのうんち』『黄牛のおくりもの』の作家権正生とかれを世にだした故李五徳との友情を描く。

◇参加費 1000円(留学生は500円)

◇申込 申込みは不要。ただし、懇親会参加希望の場合は事前に仲村修まで。

《ミニ展示・ミニ書店あり》

懇親会

18:00~20:00「平衡六(へえろく)」で。

会費3000円(ご希望の方は事前にご連絡を)

*連絡・問合せはハガキ(〒662-0857 西宮市中前田町8-28)、TEL&Fax(0798-33-9433)、Eメール eorini@h5.dion.ne.jp で、仲村修まで。

あとがき

畑中圭一

しかた・しん会長の急逝に伴い、不肖たくしが会長を務めることとなりました。これまで『アジアの風』を作ったり、大会の企画や調整、他機関との連絡、資金集めなどに走り回っていたのですが、今度は代表という責任ある立場になって、かなり戸惑いを感じています。しかし、八月の大会を前にして、今はなすべきことを着実にやるしかないと思います。幸い数人のボランティアの方々の頑張りで、今のところ順調に準備が進められています。あとは公開プログラムに大勢の方が参加してくださって、理解の環が広がることを願うばかりです。今号の特集は、そういう願いにもとづくものです。どうか暖かいご理解を賜りますように。